

北村透谷論

小田切 秀雄著

近代文学研究双書

八木書店

< 著者略歴 >

小田切 秀 雄 (おたぎりひでお)

1916年 東京に生まれる

1941年 法政大学文学部卒業

現 在 法政大学文学部教授

著 書 『近代日本の作家たち』

『文学的立場と政治的立場』ほか

現住所 東京都目黒区本町1-2-16

北 村 透 谷 論 <近代文学研究双書>

定価 1,200円

昭和45年4月20日 第1刷発行

著 者 小田切 秀 雄

発行者 八 木 敏 夫

発行所 株式 八 木 書 店
会社

〒101 東京都千代田区神田神保町1-45

電 話 03-291-2965 / 振替 東京 10457

印刷所 奥村印刷 製本所 美成社

©1970 H. ODAGIRI

1395-9006-8500

はじめに

北村透谷について、わたしの書いてきたものすべてを、ここに収めた。よかれあしかれ、これが『わたしの透谷』である。わたしは昭和一七年に、戦争下の暗黒のなかで、遠い過去のなから透谷を『発見』し、その鮮烈と深さに驚いた。それは、おなじころに、レールモンツフヤスタンダールを『発見』したのと同じであった。いらい、わたしは透谷の徒となり、こんにちにいたっている。透谷との出会いは、わたしにとって、いわば生涯の事件の一つであったが、それがどういう意味のものであるかについては、それいごこんにちいたるまで二七年間にわたって書いてきたものを集めた本書そのものが、不十分ながら一応は語っているであろう。

長い歳月のあいだに、それぞれ独立の文章として書いたものを収めたので、内容上多くの重複があり、判断や評価の上で多少の変化もある。いつの日にかたっぶり日時をとってそれらを整理し、統一し、展開して、一つのまとまった透谷論にしたい、と思ってきたが、そう思うようになってからでももうずいぶん年月がたっている。いつそれが実現できるかもわからない。それで、わたしの監修しているこの「近代文学研究双書」にわたし自身のも何か一冊入れねばならなくなったのを機会に、思い切って、わたしのこれまでの透谷論を、書いたときのままの形で集めて、こ

の本をつくることにした。したがって、透谷と自由民権運動との関係がまだまったくわかっていなかったところにその調査の必要を主張して手さぐりで書いた『透谷と政治』（昭和一七年）のようなものをも、そのままの形で収めておいた。三多摩の自由民権運動とそのなかでの透谷の活動についての、歴史家の色川大吉による綿密な調査が出ている現在では、こっけいな文章のようなのだが、もともと色川はわたしのこの文章などに疑惑をいだいて調査をはじめたという面もあり、いまではいくらか透谷研究史上の文献としての意味もあろうか、と思つて収録することにしたのである。

なお、本書に収めたものうちに、透谷と石川啄木と小林多喜二との三人をあわせて論じた、敗戦直後の文章がある。それから二〇余年後の、一昨年从今年にかけてわたしは、『石川啄木の世界』（潮新書）・『小林多喜二』（増補版、有信堂）・本書というふうに、その三人についてそれぞれ一冊の本をつくったことになる。初心を忘れなかったといえは聞えがいいが、実はいつまでたつても完成しないので強引にまとめた、というにすぎない。しかし、とにかくこの三人について、それぞれ一冊の本がようやくできた、ということにかすかなよろこびを感じているのも事実である。

新しく出版社八木書店を発足させて「近代文学研究双書」の刊行に勉強している八木壮一氏のために、この本をつくったということもある。しるして記念としたい。

一九七〇年一月

著者

はじめに

日本近代文学の主体……………一

『楚囚之詩』について……………一〇

『厭世詩家と女性』の問題……………一五

透谷をめぐる文学史的状况……………二七

I 形成期の文壇の性質 元

II 浪漫的動向と近代的自我 四

III 文芸思潮の形成へ——『しがらみ草紙』、道闢論争、『蓬萊曲』—— 五

透谷の仕事——付・『文学界』派のひとつ……………六二

近世文学と近代文学——透谷による批判と継承と……………八三

透谷と日本近代文学の成立……………九五

日本近代文学史把握と透谷観の問題……………一五

I 透谷愛山不可併称 二五

II 「近代的自我史観」という虚像 一三三

III 透谷の弱点と、透谷論の弱点と 一六四

三人の青年作家——北村透谷・石川啄木・小林多喜二——……………一七七

透谷と政治……………一九七

透谷と現代……………二〇八

透谷・藤村の現代的な意味……………二一〇

透谷と天知・残花のこと……………二二三

内田魯庵——透谷継承者の一人としての——……………二四一

北村透谷の位置——文学理念喪失の現代にたいして——……………二六五

わたしの透谷……………二七三

透谷との出会い……………二七九

〔付載〕文学確立の礎石——北村透谷の意味——……………二九一

日本近代文学の主体

一

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものがあるが故に戦ふものなるを。戦ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると劍を以てすると、戦ふに於ては相異なるどころなし、然れども敵とするものの種類によつて。戦ふものの戦を異にするは其当なり。戦ふものの戦の異なるによつて、勝利の趣も亦た異なるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は、斯の如く勝利を携へて帰らざることあるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。斯の如き戦は、文士の好んで戦ふところのものなり。――

明治二六年、山路愛山との歴史的な論争に捧げられたいくつもの文章のうちの一つで、北村透谷はこのように書いた。まことに透谷こそ、近代日本文学の歴史の上で、『戦ふ為に生れたる』稀有の人物の一人であった。その戦いの跡はこんにち三巻の『透谷全集』となつてのこつているが、封建的反動と俗物と迷蒙との明治的な散文性の支配してゐた明治二〇年代前半の実世界に決然と戦いを宣し、そのような実世界に固有の文学的諸觀念の低俗と飽くところなく闘争した透谷の詩人的エネルギーは、こんにち顧みるわたしたち後進をして奮いたたしめずにはおかぬ。闘争のエネルギーにして透谷ほどに灼熱的であり、闘争の対象の把握において透谷ほどに痛烈である例をわたしは多く知らない。しかも自らの戦いは、『勝利を目的として戦はず』と書かざるをえなかつたように、自身には前途に輝かしい勝利の日を予想しえざる痛苦にみちた戦いにはかならず、このことは『空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなす』というような自己内容の把握・提出の仕方と関連しているが、そのような仕方をもって近代日本文学確立のための歴史的な戦いに進み出た透谷は、右の文章を書いたわずか二年のうちに『戦争の中途に何れへか去る』ごとくして若い一生をみずから絶つたのであつた。『斯の如き戦は、文士の好んで戦ふところのものなり』とかは書いているが、透谷以前に『斯の如き戦』を戦つて『戦争の中途に何れへか去』つたいかなる近代日本文学者があるか。もとよりわたしは、二葉亭四迷の存在を忘れることができない。二〇年代のはじめに『浮雲』を書いてかれも『何れへか去』つた。しかし二葉亭が去つたのは『戦争の中途』にであつたらうか？『浮雲』の文三は、官僚と封建的俗物の社会からはみだしたところから描きはじめられる。かれは憤り悩むがかれをのみださしめたものにたいする決然たる挑戦は行なわない。『戦争』の代りに、しだいに追いつめられてくる孤独感がある。二葉亭はちょうど文三のごとくにして『浮雲』を完

結もさせずに文学の世界を去った。二葉亭は退いたのである。これにたいして透谷は、剣の刃も自分の身ももろともにポロポロとなるまで戦い、戦いのはげしさに短かい炎のように燃え切ってしまった。闘争のエネルギ―は、みずから発した熱のために、またたく間に消磨してしまつたのであつた。

二

明治元（一八六八）年、透谷の生れた年に日本の近代社会は形の上ではその第一歩をふみだしたのであつたが、明治二〇年代前半、透谷の青春の日々の送られた時代がどのようなものであるかは、『我は斯く籠囚の身となれり。我は今無言なり、膝を折りて柱に憑れ、齒を咬み、眼を瞑しつゝあり』という『我牢獄』の実感に満ちた文章が、いわば象徴的に物語っている通りである。藩閥と官僚の重苦しい絶対支配、封建遺制のありとあらゆる形での拘束と圧迫、こんにちその正体が全人民の前に明らかになつたあの欺瞞的な制限議會の政治、政商的マンモニズムの横行、等々が時代の前面をおおい、もとよりこれにあらがう人民の勢力や強烈な個性がまつたくなかつたわけではないにしても、それは具体的・現実的な力として登場する場合には、一般にはゆがんだ、または妥協的な形でしか活動しえなかつた時代。種々の可能は時代のたたまれた襲々のなかにひそんでいたが、全体の姿としては、『閩の王国』のごとき時代。この暗鬱を鋭く批判しうる文学者のみが、真に文学者の名にあたいする。

だが、坪内逍遙の『当世書生気質』に見られる大学生たちの、いささかも不安を知らぬ現実肯定、楽天的な未来へ

の信頼、それとからんで、人生の痛苦をのぞいたことのない作者の戯作趣味、等々に接するとき、わたしたちは時代と知識人との近代日本における特別な関係の最初の明瞭な反映を見る。明治知識人の多くは、その知識と技術とををもってぼうだいな軍事的・官僚的・財閥的な支配機構に吸収され、奉仕し、優遇される。支配機構から離れ、かえってそれを批判するところの、ことばほんらいの意味での「インテリゲンチヤ」とはまったく異なった知識人たちである。近代日本はその階級的支配機構の過大と過重とのゆえに、つねにこのような知識人のぼうだいな存在をたもちつづけて来た。『当世書世氣質』はそのような知識人の最初の「写実」的表現であるが、それは同じく逍遙の文学理論『小説神髓』が「写実」を要望しながら写実する主体的要求の人間の切実をほとんどまったく自覚していない事情に明らかのように、時代の一現象に表面的に触れて安んじうる自足した精神を語る以外の何ものでもなかった。

この逍遙の盟友として、二葉亭四迷が『浮雲』をもって登場するのは、まことに歴史の皮肉である。逍遙の写実理論に二葉亭が関心をもって近づいていった事実などのあることから、この両者のまったき隔絶という真実を割引きして考えることは許されない。はじめにのべたように、二葉亭は官僚の世界の強圧と醜陋、その支配下にある卑俗な散文的な日常生活、これらを鋭く実感して、そのような世界からの孤独において自己をとらえる。『浮雲』の孤独な文三はかくして描きだされる。文三は何びとによっても支持されぬどころか、理解さえされぬ。かえってかれは実生活から追いつめられる。このような文三の形象はただちに二葉亭自身とかさなり合い、二葉亭は最初のインテリゲンチヤとして二〇年代の日本の現実に対立した。しかしかれは戦う代りにひっこんでしまった。現実と対立しても、対立する二葉亭を支える者が社会的に存在しなかったということは決定的な事情となった。『当世書世氣質』の代表する

ような知識人とはまったく異なったインテリゲンチヤが、ここにその先驅的な姿をチラリと見せたが、それは時代の波瀾の間にただちに影を没してしまつたのであつた。

その代りに、逍遙の『写実』主義理論によつて元氣づけられた硯友社の文学が、時勢粧をこらして文学の世界を支配すべく立ち現われてくる。二葉亭が対立せぬばならず、透谷がのちに『我牢獄』とさえ感じねばならなかつたこの時代の現実、そのなかで自足して趣味的な追求に耽りえていた硯友社の文学にとつては、その苦しみや悲しみさえ時勢粧としてしか問題となりえなかつた。自足した精神は、ほんらい実生活の立入つた追求にたええぬものである。そしてその代りとして、元祿文学の奇怪な模倣が行なわれ、人間や人生についての觀念の封建的な混沌とゆがみとが時代を風靡した。近代的な人間の要求とその自覚は、この二〇年代前半にいたつてもなおまどろみつづけていたのであつた。——透谷がその戦いを開始したのは、まさにこの点においてであつた。たとえば尾崎紅葉の『粹と俠とを集めて一美人を作り、其一代記を書いた』作品『伽羅枕』を取上げて、透谷は書く。『旧作家の画き出せる粹なる者、眞の恋愛とは異なる節多』いが、これは『恋愛の性は元と白昼の如くなり得る者にあらず。若し恋愛の性をして白昼の如くならしめば、古来大作名篇なる者、得難かるべし。恋愛が盲目なればこそ痛苦もあり、悲哀もあるなれ、また非常の歡樂、希望、想像等もあるなれ。「恋と哀は種一つ」と巢林子が歌ひけるも、恋愛が白昼の如くならざるよりの事なり。故に恋愛が人を盲目にし、人を痴愚にし、人を燥狂にし、人を迷乱さすればこそ、古今の名作あるなれ、而して古今の名作は爰を以て造化自然の神に貫ぬくを得て、名作たるを得る所以なり。然るに彼の粹なる者は幾分か是の理に背きて、白昼の如くなるを旨とするに似たり。盲目ならざるを尊ぶに似たり。恋愛に溺れ惑ふ者を見て、粹は之

を笑ふ、総じて迷はざるを以て粹の本旨となすが如し”さらに“粹道と恋愛と相撞着すべき”第二の点は“粹の雙愛的ならざる事なり。抑も粹は迷はずして恋するを旨とする者なり、故に他を迷はずとも自らは迷はぬを法となすやに覺ゆ”とする。次に“俠”については“われは実に徳川時代に平民の理想となりて、異色の光彩を放ちしこの「俠」を其時代の平民の為に憐むなり”として、それが実は憐まるべきものにすぎぬゆえんをさまざまにのべているが、もはや引用ははぶくことにしよう。

“粹”や“俠”を理想とせぬ場合でも、そのようなものにこだわらざるをえなかつた硯友社的な低俗の支配にたいする透谷のこうした根本的な批判は、『伽羅枕及び新葉末集』・『粹を論じて伽羅枕に及ぶ』・『徳川氏時代の平民的理想』等々、各方面から精力的に行なわれ、素町人的な自足した精神にたいする戦いはくりかえし行なわれる。“粹”を右のような仕方を取上げて批判することは、硯友社文学をその核心たる人間観念のゆがみと低さとにおいてあばき、それによつて近代的な人間観念とその要求とを直接に対置しつゝ批判することである。この批判の適確と鋭さは、もとより同時代にその比を見ぬばかりでなく、今日なおまったく生き生きとしてゐるが、“粹”に対置された自然的激情としての恋愛、しかも“雙愛的”でなければならぬとする透谷のこの恋愛の要求が、硯友社支配下の文学界、さらにそのような低俗な文学界に相応した時代の暗い現実、これらのなかではたしていかなる運命を与えられねばならぬかは、まさにそれが贅言を要しないというその点で透谷の明治的実社会との対立の深刻を物語る一つのインデキスたるものである。——ところで、透谷の批判は、硯友社文学支配への一つの反動として現われた山路愛山一派の“進歩的”実利主義の文学論にたいしても徹底的に遂行され、そのほかドストイェフスキイの『罪と罰』にたいする理解

の先駆的な深さや、『平和』という雑誌をみずから編輯して日本最初の反戦的平和主義的批評家として活躍したこと、等々、ここに取上げるべきことが多いが、これらすべての活動を通じて、透谷は自己の理論と要求の究極としての『想世界』・『内部生命』の主張に到達したのである。この『想世界』・『内部生命』こそ、かの『高大なる戦士』が『空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなす』という場合のその目的たるべきものにはかならぬ。しかしながら、もともと『想世界』とか『内部生命』とかということばじたいがきわめて抽象的・観念的であるように、それについての透谷自身による説明を求めてもまた同様に抽象的観念的たるを免れない。わたしはそれをひとつひとつ引用するよりも、ここでは、いかにしてかれがこのような主張に入ってしまったかをのべることによってその実際の内容を以下に見ようと思う。

三

のこされたわずかな書簡や日記や断片などが伝えているように、透谷は、自由民権運動への熱意にひとたび明るくふくらんだ少年時代の胸で、はやくも実世界への絶望を、——古い権威と拘束が前述したような錯雑と重さで暗く閉して容易にゆるがぬその時代の実生活へのはげしい絶望を、身にしみて経験せねばならなかった。が、絶望から屈服にいたるには少し強きにすぎただけの烈しい気質がかれの内部に鬱屈していた。それは自由民権運動への、かつての深い共感ということと関連している。したがってかれは、実世界とのはげしい対立関係にある自己を、自己の否定

や諦念などに向つて処理する代りに、非難さるべきは自己でなくして、かえつて実世界こそ否定にあたひするものだ、と確信する。ここに、透谷の文学者としての戦いの第一歩がはじまる。やがてかれは、実世界にたいして自己を「世界」として対立せしめる方法をつかんだ。古いものとどされた実生活は、人間にとつて外面的な意義しかもちえないとして、べつに「内部生命」の嚴肅な世界をおしだしてこれに対立せしめた。「想世界」・「内部生命」は、実世界とはその次元を異にしたより、高次の精神の世界であり、実世界に属するものは「悉く仮偽」たるを免れぬとされる。この「内部生命」といい、「想世界」というものの提出の意味が、人間の内面の世界、精神の世界的徹底的な近代的獨立・解放ということを意味するとともに、この獨立・解放が現実における諸解放をたんに精神・内面の解放に狭く限定することによつて、その代償として徹底的たりえているということには注意しないではいられない。これは現実の世界において、あたかも『浮雲』の文三が作品中の何びとからも理解もされず支持もされなかつたのと同様に、透谷の戦いが民主主義的・革命的な市民と勤労大衆とによつてついに現実的には支えられることのなかつた近代日本の特殊なみじめさに由来するものである。実世界にそのような階級の力と鬭争の姿を見ることができないところに、実世界の全面的な否定がくる。そして、実生活におけるあらゆる古いもの・ゆがんだものとの戦いを強化するにつれて、かれはおのずと自己の内容の觀念的な昇華につき進まざるをえなかつた。このような透谷であつたゆえに「文学」が人生に相渉るものなることは何人も疑はぬ」ところと承認しながら、その卑俗なあい渉り方への鋭い批判と対決とから「勝利」を目的として戦はず・「空」を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなす」ことを文学に要求するにいたつたのであつて、透谷の「想世界」・「内部生命」の抽象性は、それ自身として評価さるべきであるよりも、むしろ「想世界」

『内部生命』なるものをもって実生活の反動と凡庸とに対比せしめ批判する、その批判の深刻さにおいて評価さるべきものである。

透谷は、戦いに身を焼きつくすことによって、その戦いが実に身を焼きつくすにあたうる戦いであることを立証した。——文学は、透谷にとって、嚴肅なる『想世界』・『内部生命』へのほとんど唯一の『梯子』たるものとしてすえつけられたのであったが、このことによって『文学は男子一生の仕事とするに足る』か足らざるかの二葉亭的な文学への懷疑ははじめて歴史的に払拭され、文学の存在意義は確立した。そしてこのことは、文学の主体が、反動と凡庸とにたいするはげしい戦いにおいてははじめて強力に確認されたことを示す。透谷によって確認されたこの新しい文学の主体こそ、やがてかれの死後に多少の曲折を経て自然主義にいたり、切実な現実追求の主体内容となって近代文学を形成・確立せしめたところの当のものであった。

そして近代日本文学がその核心において、一般に支配的機構に従属した知識人の群からは区別されるところの、インテリゲンチャ独自の文学として成立する端緒がここに確立したのであった。

『楚囚之詩』について

明治三二（一八八九）年は、日本近代詩の実質上の成立の年である。というのは、その四月に北村透谷の『楚囚之詩』が出、またひき続いて夏の『国民之友』付録には森鷗外らの訳詩集『於母影』が発表されたからである。この以前にも——すでに明治一五年に『新体詩抄』は刊行され、これに刺激されてさまざまな新体詩の試みが出版物となって現われていたが、すべてそれらは形式上の新しい試み、移植様式の実験というところにとどまっていた、それらの試みを真に生命あるものとする新しい詩的な内容とそのイメージとを欠いていた。日本近代の詩精神はまだ、まどろんでいたのである。

透谷の『楚囚之詩』も鷗外らの訳詩集も、いずれも新しい形式の試みという点ではそれ以前のものと同じ似た形を示していた。しかし、決定的にちがうのは、まだ未熟な窮屈なところは伴っていたけれどもこれらには詩人の深い内面の衝迫があり、それが自己にふさわしい表現形式を求めて、未熟を恐れずにあふれ出ははじめている、ということである。これが文学上ではどんなに画期的なことだったかは、透谷の場合この作品にどれほどの自信をもつこともでき